

レルミナで排卵調節した自然周期の融解胚移植の有効性について

医療法人社団 徐クリニック
徐 東舜

【目的】 自然周期での凍結融解胚移植の際に、排卵時期を同定するのは困難な事がある。今回我々は、Gn-RHアンタゴニストの内服薬であるレルミナ錠を用いてLHサージを抑制することで自然排卵を抑制し、人為的に明確な排卵日を確定させ自然周期での移植を行ったので報告する。

【対象】 2019年7月～2020年4月の間の凍結融解胚移植予定の中で40歳未満の移植患者に対しインフォームドコンセントを得られた127症例(A群)を対象とした(年齢 34.5 ± 3.2)。それ以前にレルミナを使用しなかった378症例(年齢 35.3 ± 3.1)を比較対象とした(2016年1月から2019年6月)。378例の中でLHサージが事前に無かったもの249症例をB群(年齢 35.0 ± 3.2)、LHサージがあったもの129症例をC群(年齢 35.7 ± 3.0)とした。

【方法】 月経3日目よりレトロゾールあるいはセキシビット内服の後、月経10日目から卵胞計測を行い卵胞が14mmに達した時点から少量のhMGとレルミナ錠の内服を連日(22:00)投与した。卵胞径20mm前後の時点でE2,LH,P4測定し、問題なければrhCGを筋注した。その3日後に排卵の確認を超音波で行い再度E2,LH,P4を測定し問題なければ、この4日後に胚盤胞移植した。

【結果】 A群のいずれの症例においてもLHサージの発現や排卵は認めなかった。rhCG投与日のホルモン値をA群、B群、C群で比較するとE2： 441.2 ± 310.9 vs 419.1 ± 195.7 vs 422.9 ± 222.0 pg/ml、LH： 2.2 ± 1.6 vs 9.9 ± 7.9 vs 34.9 ± 18.8 mIU/ml、P4： 0.49 ± 0.40 vs 0.39 ± 0.20 vs 0.82 ± 0.49 ng/mlであり、LH、P4の値はC群がA,B群より有意に高かった。妊娠の結果をA群、B群、C群で比較すると移植当たりの妊娠率は 55.1 vs 53.0 vs 41.9 %、着床率は 44.1 vs 44.9 vs 34.1 %、流産率は 17.1 vs 20.5 vs 18.5 %であった。妊娠率で比較するとC群はA群、B群に比べ有意に妊娠率の低下を認めた。

【結語】 レルミナで排卵調節をする事で、良好な妊娠率が期待できると考える。